

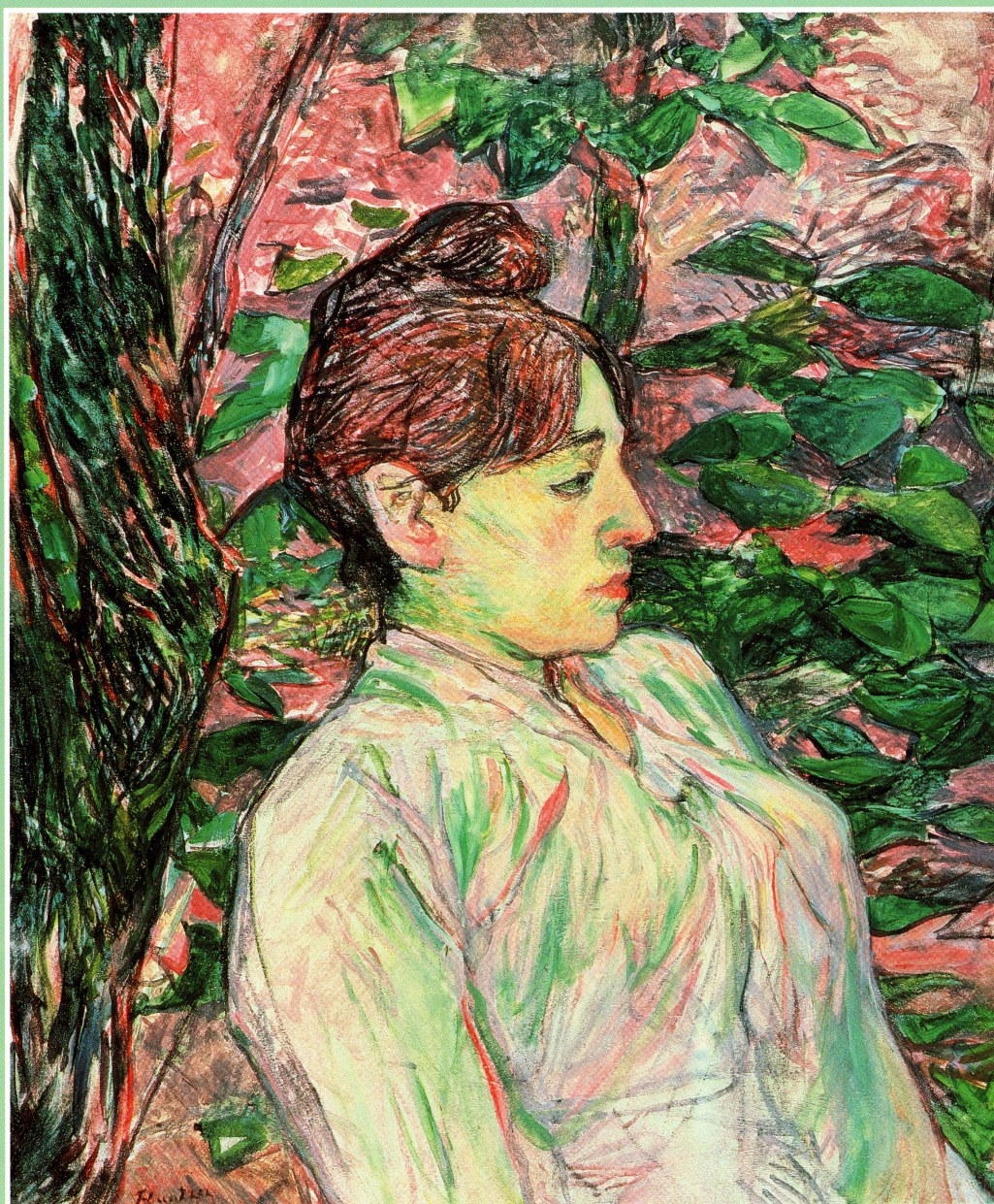
# 空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

愛知県美術館友の会 会報

MEMBERSHIP

第 12 号



## 巻頭言 「21世紀を迎えて」 愛知県美術館長 長谷川 三郎

新たな世紀が始まりましたが、日本の美術と美術館の世界は新たな展望をもって21世紀を迎えることができたでしょうか。わが愛知県美術館はどうでしょう。

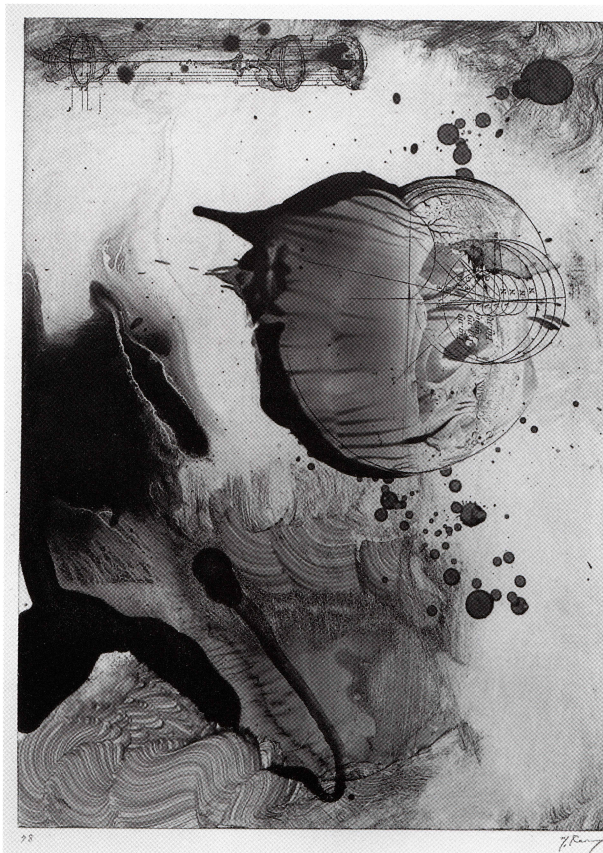
20世紀最後の10年は、新生愛知県美術館の胎動と誕生から揺籃期の10年間とほぼ一致しています。1955年以来的歴史を持つ愛知県文化会館美術館の有形無形の財産を継承しつつ組織内容規模いずれも大きく一新して、現在の愛知県美術館が愛知芸術文化センターの10階に開館したのは1992年の10月でした。来秋には開館10周年を迎えます。

国外国内を問わず20世紀最後の10年間における政治経済社会の情勢の大きな変動は、美術と美術館の世界にも少なからぬ影響を及ぼしました。分かりやすく象徴的な例を挙げることができます。それは、わが国の美術品輸入額の変化です。1980年代の後半に年を追って飛躍的に増大していった美術品の輸入は、1990年に最高に達します。1985年には470億円だった輸入額が1990年には何と5,966億円を記録するのです。この中の数億円分かは当館の所蔵作品になっているかも知れません。ところが翌1991年には1,321億円に減少し、1995年には347億円にまで激減してしまうのです。このような甚だしい美術市場の変化に比べれば緩やかではありましたが、公私立にかかわらず日本の多くの美術館にも、その活動を支える経済的環境に同じような変化が波及して行ったことは皆様ご承知の通りです。まさにこの大きな変動のさ中に愛知県美術館は誕生したのです。

申し上げるまでもなく、美術館にとって収集は展示と並び最も重要な活動のひとつです。とりわけ近代・現代美術を活動の対象とし、しかも誕生間もない当館のような美術館にとっては、その継続と蓄積の成否は将来の美術館像を左右する決定的な要因となるでしょう。愛知県美術館は、旧美術館からほぼ1,000点の所蔵作品を継承し、1988年に設置された美術品取得基金による収集活動と、これに加えてご寄贈者のご援助によって、現在までに1,800点を越えるコレクションに充実させてきました(\*この他に1,460点の藤井達吉コレクションがあります)。1997(平成9)年度までの収集活動の詳細と経緯、そしてその成果については、『愛知県美術館所蔵作品目録』(1993年)と、開館5周年を記念して開催した全館所蔵作品展のカタログ『近代美術の100年 — 愛知県美術館のコレクション』(1998年)に譲りたいと思います。残念なことは、ここ数年、県の財政事情を反映して美術品取得

基金の活用枠が制約削減の一途を辿り、収集活動に停滞を来していることです。一刻も早い復活が美術館の願いですが、一方、このような状況のもとでは当館の収集に相応しい優れた作品の寄贈や寄託のあることが大きな励みになります。昨年度は9点の作品と1件の資料のご寄贈を受け、今年度も7点のご寄贈作品を新収蔵作品としてご紹介できるようになりました。

美術館が優れた作品や資料を収集し展示し、また保存するのは、人間の全人格的な精神活動の所産としての造



加納光於《語りえぬものための変容》50点連作よりNo.23  
1978年、エンコスティック、紙、36.6×26.6cm、2000年度作者寄贈

形作品やその参考資料をすべての人々の共有財産として公開するとともに、それらを後の世代にまで継承してゆく使命を負っているからではないでしょうか。「もの」である美術作品は、必然的にそれが在るための空間を必要とし、その多くは自然の素材から成っているため自然環境に放置すれば容易に物質の循環の中に飲み込まれ、やがて消滅してしまいます。美術館の役割に占める収集活動の意義が広く理解されて、はじめてその成果である

コレクションの正当な評価も生れることでしょう。

所蔵作品の収集とともに重要な美術館の活動は、企画展の開催です。愛知県美術館は、1992年の開館以来8年余の間にさまざまな企画展を実現してきましたが、現在開催中の『岸田劉生展』は記念すべき50番目の展覧会に当たります。本誌7頁の記事の通り、収集活動と同じように、事業費の削減によって企画展の年間開催数も減少のやむなきに至っていますが、平均すれば毎年6本の展覧会を開催してきたことになります。

ところで、昨年の『セザンヌ展』の入場者数は17万1千人に達し、開館以来最も多くの入場者を迎えた展覧会となりました。『セザンヌ展』に次ぐ入場者を数えた展覧会は『アンドリュウ・ワイエス展』(12万人、1995年)、そして『レンブラント、フェルメールとその時代』(10万5千人、2000年)、『パウル・クレーの芸術』(10万3千人、1993年)と続きます。本誌11号で林葉子さんも触れていらっしゃるようですが、最も入場者の少なかった展覧会は『戸張孤雁と大正期の彫刻』(7,996人、1994年)で、『危機の時代と絵画 1930-1945』(8,379人、1998年)がこれに次いでいます。

入場者が10万人を越えているのはいずれも欧米の名高い画家の展覧会であること、これはどなたも納得なさることでしょう。『戸張孤雁と大正期の彫刻』の入場者が少なかった理由は、容易に説明できます。戸張孤雁の名が一般にはほとんど知られていなかったことに加えて彫刻展であったことです。彫刻は、仏像などはともかく、絵画と比べて日本ではなぜか一般の関心が低く、これは大変残念なことと言わねばなりません。『危機の時代と絵画』は、展覧会名が示す通りの妥協を許さない真摯な内容そのものによって説明できるでしょう。ところが、この二つの展覧会は、批評家や他の美術館の学芸員などの間ではその内容と質が別けても高く評価されていたのです。専門家たちの評価と一般の人気との乖離の典型的な例と言うことができるでしょう。これは展覧会にはしばしば見られる現象で、学芸員同士の間では、他の美術館の学芸員から賞賛されると「入場者数に影響するから褒めないでくれ」という冗談が交わされるほどです。

いかにして多くの方々に親しまれる美術館にするかという努力と工夫を怠ってはならないことは当然のことです。おそらく、多くの方に見て頂くことを切望しているのは誰よりも当の担当学芸員でしょう。また入場者の獲

得、ひいては経費と収入の均衡という運営上の経済的な成功も、無論軽んじて良い筈がありません。けれども、それでは入場者数と経済効率が展覧会の成否評価における最優先事項になってしまっても良いのでしょうか。この問題に関しては、今春から独立行政法人化される国立美術館博物館の活動の評価基準とその方法がどのようなものになるかが一つの試金石となるでしょう。またさまざまなメセナ活動は、その規模の大小にかかわらず、企画内容の質の高さを求めようとする理想と運営上の現実とを調和させる役割をになっています。さらに、企業の協賛や文化財団の助成などとは性格が異なりますが、美術館の〈友の会〉の活動と存在そのものも、広い意味での有効なメセナの一つに位置付けることができます。

さて、21世紀を迎えての展望と抱負を述べよという編集部からのご要望にお応えするには、視点を変えなければなりません。今春から、県内の芸術系の大学で美術館とも関わりの深い計画が実現されます。愛知県立芸術大学には長年の懸案であった芸術学科が、名古屋芸術大学には美術文化学科が開設されます。それぞれ特色は異なりますが、美術史を中心とした芸術理論の教育と研究を行うという点では共通しています。これまで県内では、美学美術史を専門とする講座が設けられていたのは名古屋大学ただ一つであったことを思えば、この地域の美術環境に大きな変化がもたらされることでしょう。当館に限らず、美術館にとってこれは大いに歓迎すべきことです。教育と研究双方の領域でこれらの新設学科とのさまざまな交流の可能性が想像されます。

これに呼応する意味でも、愛知県美術館は企画力に加えて調査研究能力のなお一層の向上が望まれます。その環境整備には、美術館の存在意義をよくご理解いただき、さまざまな立場から支援して下さる多くの方々の存在が何よりも大切です。美術を愛するすべての人々への、美術に関わるさまざまな充実したサービスの提供は、質の高い調査研究が根底にあってこそ初めて可能なことなのです。

## ただいま準備中…

### 色彩の歓び

#### ～メルツバッハー・コレクション展～

4月13日より、世界で最も重要な近代美術コレクションのひとつといわれる、メルツバッハー・コレクション展が開催されます。

スイスの実業家、ヴェルナー・メルツバッハーとガブリエーレ・メルツバッハー夫妻のコレクションは、その幅の広さと質の高さから世界でも最高水準と見なされています。

とはいえ、メルツバッハーと聞いてピンと来る方は多くないでしょう。彼らは世界中の展覧会に出品しているにもかかわらず私達はその名を知る機会が少ないのは、これらのコレクションが非公開であり、また展覧会への出品や作品を購入するときにも匿名で行われるためです。

30年以上という長い時間をかけて収集されたこのコレクションの対象は、19世紀後半から20世紀全般にかけての、きわめて多岐にわたるものです。これらのコレクションに共通してみられるのは豊かで鮮やかな色彩です。メルツバッハー夫妻は大胆な色彩を好み、19世紀後半からの色彩の制約から解放された画家達の作品にコレクションの重点が置かれています。



パウル・クレー 《月は昇り、陽は沈む》

ルノワールやファン・ゴッホ、モネに代表される印象派から、ピカソ、モディリアーニといった巨匠たちの名作、そしてロシア・アヴァンギャルドや未来派などの作品がそろっています。

また、マティス、ブラックらのフォーヴィスムとカンディンスキー、マルクといったドイツ表現主義の作品は特に充実しており、世界各地で開催されるこれらの展覧会には必ずといってよいほど出品されています。

当愛知県美術館で以前開催された展覧会でも、例えばクレーの《月は昇り、陽は沈む》など、このメルツバッハー・コレクションの中から出品されたものが数点あります。今回、この展覧会で展示されるのは印象派から1950年代までの、ヨーロッパ近代絵画88点。見覚えのある作品を探してみるのはいかがでしょうか。

(伊奈・森)

#### <メルツバッハー・コレクション展>

期間：4月13日(金)～5月27日(日)

友の会特別鑑賞会：4月19日(木)

○その他の2001年度 企画展 及び 講演会 予定

#### <ロダンと日本>

期間：6月22日(金)～8月19日(日)

講演会：6月30日(土)・7月7日(土)

友の会特別鑑賞会：6月26日(火)

#### <リチャード・バックミンスター・フラワー展>

期間：9月14日(金)～11月4日(日)

講演会：9月15日(土/祝)・9月22日(土)

友の会特別鑑賞会：9月20日(木)

#### <ポンペイ展>

期間：2002年2月8日(金)～4月7日(日)

講演会：2月9日(土)・2月16日(土)

友の会特別鑑賞会：2月14日(木)

※ 上記はあくまでも現時点(2001年3月)の予定です。日程が変更になる場合もありますので、来館される折には、展覧会のお知らせ、美術館ホームページなどで開催日時をお確かめのうえご来場ください。

美術館ホームページ：

<http://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

## 私のこの1点

～ 新収蔵作品から ～

原 裕治 (1948— )

アポクリファ No.2

1994年

技法材質 : 油彩・背高泡立草・紙・木

180×270 cm

愛知県美術館では、現代に活躍する作家の注目すべき活動を取り上げ、所蔵作品展の中でテーマ展として紹介してきました。1994年に開催した原裕治展をご記憶の方も多と思います。今年度の新収蔵作品として、その時の展示作品のひとつ《アポクリファNo.2》を原さんご自身からご寄贈いただきました。

原裕治さんは、1948年に新潟市に生まれ、1973年に愛知県立芸術大学大学院彫刻科を修了されています。現代の立体造形の世界で活躍する戸谷成雄や遠藤利克、今井瑾郎さんらと同世代にあたります。原さんは、人物などの具象彫刻から出発しています。そして1975年頃から砂や鉄錆、石、植物などを用いた非具象の平面的な作品に取り組み始めました。〈飛跡〉と名付けられたそのシリーズでは、素材の質感や触感を生かしながら、物質の存在やその痕跡などを作品に表現する試みを展開します。そして1990年頃からの〈流跡〉シリーズでは、これに木や草、金属粉、油彩などの層を重ね、それをグラインダーで削り取って、さらに密度感の高い作品を展開しています。

1975年頃からの原さんの作品を理解するうえで、実に興味深いエピソードがあります。それは、ある時草むらで金属製の円環が光っているのを見つけて拾い上げたところ、地面にそれが埋まっていた跡がくっきりと残っているのを見て強く心引かれたということです。〈飛跡〉シリーズには、「見えない素粒子の存在は、その飛跡によってのみ知られる」という考えが背景にあることもあって、円環はたいへん重要な形態となりました。そして円環は繰り返し取り上げられてきました。今回の作品でも、円環はたいへん重要な役割を果たしています。この作品の制作過程は実に興味深いものです。この作品の元となったのは、木のパネルに背高泡立草（せいたかあわだちそう）を放射状に並べた1991年の作品です。その作品に改めて紙を貼り重ね、それをさらに削り取って行って完成されたものです。このような手の込んだ制作方法、そしてアポクリファ（聖書外典）というタイトルからして、



原 裕治《アポクリファ No.1》



原 裕治《アポクリファ No.2》

「隠されたもの」という意味が込められているようです。

今回ご寄贈いただいた《アポクリファNo.2》は、1994年度に美術館が購入して収蔵した《アポクリファNo.1》と正負・陰陽の対をなす作品です。《No.1》は円環の内と外での線の変化による絵画的な美しさを備えています。広がっていくような放出感《No.2》の方に強く感じられます。本来一対のようにして制作された作品でしたが、1994年当時は事情があって同時に収蔵することができませんでした。今回、改めて作家御自身から《No.2》をご寄贈いただいて、ようやく本来の姿で収蔵し、皆さんにもご覧いただけるようになりました。

(愛知県美術館主任学芸員：深山孝彰)

# 愛知県美術館 素顔の扉をひらく

## ～ 第一の扉 収集 ～

「美術館」という言葉から、私たちは何を想像するでしょうか。多くの方は展覧会の様子を連想されるでしょうが、他にも私たちの知らない部分で多くの活動が行われています。美術館活動は、収集、展示、保存、教育・普及、調査・研究と大きく5つに分かれます。このコーナーでは愛知県美術館で実際に行なわれている活動を、数回にわたって順に紹介していきます。



美術館活動の基盤はコレクションの充実  
(写真: 子供観賞会)

本がなくては図書館とは言えないのと同様に、絵画・彫刻などの作品なくして美術館は成立しません。このことから、作品の収集は美術館にとって「根幹」であるといえます。本が蔵書として随時追加されていくように、美術作品の収集は美術館設立時だけでなく、美術館が活動していく上で継続して行われなくてはならない不可欠な活動なのです。

収集は美術館ごとの方針に基づいて行われています。愛知県美術館の収集方針の大きな柱は「近現代の美術」です。旧愛知県文化会館時代から準備期間を経て現在の愛知県美術館に至るまで、40年以上の地道な収集活動の成果として、所蔵作品は購入・寄贈合わせて3,000点を越えます。今もこれらに肉付けする形で、収集活動が進められています。

作品は一定の数だけあればよいというものではありません。例えば、愛知県美術館の作品の中に、パブロ・ピカソの「青い肩かけの女」があります。1点あるからもうピカソは必要ないとは考えられません。制作時代の異なる作品に出会えば受ける印象も異なるでしょうし、様々

な角度から見ることで、作家の心境の変化や時代背景も感じ取ることが出来るでしょう。どのような作品にも同じことがいえます。作品がたくさんあれば、作品展自体変化のあるものになりますし、ひろがりがあります。2点、3点と作品に触れていく過程で、1点だけでは分からなかった不思議な魅力に気づくこともあります。ある作品をあと1点加えるだけで、所蔵作品群の重みが2倍にも3倍にも増すことさえあるのです。人によって価値観や感じることはそれぞれですが、オリジナルの1点、そのものに出会うという美術的体験は、それだけで価値があるように思います。

ここで愛知県美術館の収集方法を紹介しておきます。収集は購入と寄贈に分かれます。皆さんお馴染みの愛知県美術館の顔とも言える《人生は戦いなり》(クリムト)は17億円を超えるものでしたが、トヨタ自動車株式会社の寄付金により購入することができました。購入の場合、収集方針に基づいて現在の所蔵作品を照らし合わせ最適と思われる作品を、学芸員の方が綿密な調査を重ね選択してゆきます。最終的には他館の美術館長・美術評論家・大学の美術研究者などで構成される収集委員会が、客観的な立場で購入の可否を答申します。

現在、この作品の収集が困難な状況になっています。愛知県美術品等取得基金による購入がここ2年程実質的に凍結されているのです。この為、例えば企画展でどれだけよい作品にめぐりあって購入のチャンスを与えられても、美術館は作品を購入することができない状態なのです。特に現代美術はその時点でしか収集不可能なものもたくさんあります。そのような作品の購入を、基金があるにもかかわらず「不況だから」「高価だから」ということを理由に差し止めるのはおかしいのではないのでしょうか。この問題は、私たち美術館利用者を含めた地域社会の、美術や文化に対する基本的な態度・理解にかかっていると いえます。

収集された所蔵作品は愛知県美術館の「命」であるばかりか私たちの財産でもあります。所蔵作品をもとにいくつもいくつも展示を積み上げ、作品に厚みをあたえ、その命はだんだんと膨らんでいます。今度美術館に足を運ぶ時は、ぜひ、美術館の「命」にじっくり触れてみてください。その鼓動を、歴史を、成長を、肌で感じることで、きっと今まで気づけなかった何かに触れることができるでしょう。私たちもその「命」を共に育てていきたいと思っています。  
(安井・水野)

## 美術館を体験する

### ～ 愛知県美術館の楽しみ方 ～

友の会の方からこんなお便りが届きました。「最近、(愛知県)美術館の展覧会が減ってきているようで少しさびしい。」「以前ほど魅力ある展覧会がなくなってきた。」「自治体の文化関連予算の削減が相当深刻なようだが、美術館の状況を知りたい。」などなど。そこで編集スタッフが愛知県美術館の木本学芸員(企画普及課長)に、美術館を取り巻く様々な状況についてお話をうかがいまとめてみました。

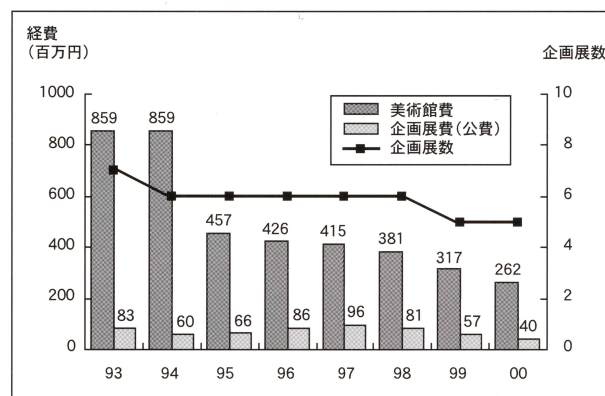
#### － 展覧会を開くには －

規模の大きな展覧会を開催する場合、その準備には3～5年くらいかかります。まず作家・作品の調査研究を進めるとともに展覧会のテーマに沿って展示しようとする作品のリストを作ります。どんな作品が、どこの美術館・コレクターのもとにあるか、貸出しできる状態かなどをひとつずつ丹念に調べてゆきます。そうやって調べた作品のそれぞれについて借用交渉を進めるわけですが、お願いしたからといって簡単に借りられるものではありません。一般に人気のある作家の場合、他の展覧会の予定と重なって作品の綱引きになることもしばしばあります。貴重な作品の場合、交渉の余地すらなく出品を断念することもあります。(借用交渉のエピソードについては友の会特別鑑賞会の折などに学芸員の方から聞かれた方もいらっしやと思います。)

#### － 美術館の台所事情は －

展覧会の準備は数年間にわたる綿密なスケジュールに沿って進められます。ですからその準備期間全体を視野に入れた安定した予算の裏付けがあってはじめて充実した展覧会を実現できるのです。図に美術館予算の推移を示します。美術館全体の予算はここ5年ほどの間に4億6千万円から2億6千万円に減りました。ほぼ43%の減少です。それに伴い企画展の費用も多い年の半分以下になりました。自治体の予算全体が縮小している状況なので文化関連の予算削減もある程度やむを得ないと思います。しかし内容の充実した展覧会を開くためには、数年先に支出できる確実な財源が必要です。毎年予算が減少していく今の状況では数年先の支出の裏付けがないため、特に海外との交渉が困難です。いったん契約した作品の借出しが予算状況によってキャンセルになるようでは美

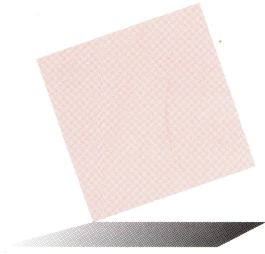
術館の信用問題、場合によっては国際問題になります。こうした状況は、美術館にとっても、またそこで開かれる展覧会を楽しみにしている私達にとっても好ましいものとはいえません。



美術館予算の推移

#### － 展覧会の費用は －

展覧会を企画し、作品を集め、美術館の展示室にそれらを並べるまでにはいろいろな経費がかかります。どのようなことに、いくらくらいかかるとお思いますか。企画をまとめるまでの調査費として学芸員の交通費・滞在費、資料購入費、通信費などが必要です。企画がまとまり展覧会を実施する段に必要なのがまず作品の借用料、その輸送費、保険料、展覧会のカタログ・チラシ等制作費、広報・宣伝費などです。昨年のセザンヌ展に出品されたオルセー美術館からの4点も、借用にあたっては相当の経費がかかったようです。海外作品の移動には借用先の学芸員も同行する場合もあるのでその費用も必要です。カタログ・チラシ等を制作するためには著作権使用料を支払うわけですが、その他にも先のアメリカン・ドリームの世紀展に出品された作品のなかには肖像権使用料として1点あたり数百万円を要求されるものもありました。展覧会を開催するための費用は年々高騰しています。これらの費用を入場料やカタログを含めたミュージアム・ショップの売上で回収するわけです。仮に展覧会の費用として1億円かかったとして、それを入场料で回収するには大人1人千円として10万人の方に来て頂きたい、ということになります。美術館、展覧会を運営することはとても大変なことなのです。(このあたりの苦労話も友の会特別鑑賞会の中で時々話題になります。)



ロビー・コンサートの会場風景

## — 美術館を体験する —

展覧会は作品を作る人（作家）とそれを見せる人（学芸員）との共同作業（コラボレーション）です。私たちはその共同作業の成果を鑑賞しているわけですが、鑑賞しながらその作家、作品についてもっと深く知りたいと感じたことはありませんか。まだ構想段階ですが、友の会では自主企画の美術講座を開催したいと思っています。友の会会員限定座談会講座も企画したいと思っています。一步踏み込んで美術館活動に関わることで、展示室で作品を見るだけでは見えてこないものを見、体験できないことを体験して欲しいと思うからです。そしてより多くの方に美術館を楽しんでもらいたいと思うからです。

最近の展覧会や美術館の財政状況から始まりずいぶん飛んだまとめになりましたが、展覧会・美術館を作るのは結局、人（作家、学芸員、鑑賞者）です。言い換えるなら、様々な人々の関わり合いの結果が展覧会・美術館だともいえます。鑑賞者の立場から一步美術館に近づくことで美術館を多重的に鑑賞してみる、もう一步近づくことで美術館を自分的に体験してみる、こんな愛知県美術館の楽しみ方はいかがですか。

(杉山・水野)

## 編集スタッフから

今回、学芸員の方のお話を伺うことができ、大変勉強になりました。それと共に、美術館の財政問題が深刻なものであることを痛感しました。私たちにできることは、ほんの少しのことかもしれませんが、愛知県美術館が「厚み」のある美術館であり続けるよう、それを支え、その「厚み」に加わっていきたいと思っています。

(安井)

イギリスに滞在していた時、現地の美術館友の会の活動が広く、また高く評価されていることに驚きました。それに比べ日本では、まだまだ友の会というものがあまり知られていないように感じます。会員以外の多くの人たちにも友の会の事を知ってもらい、会員はもとより、一般の方々が美術館を訪れるきっかけとなるような会報づくりに参加できたらと思っています。

(伊奈)

今回は長谷川館長に「巻頭言」をお書きいただき、木本さん（企画普及課長）には美術館をめぐる様々なお話をうかがいました。又、深山さん（主任学芸員）にも興味深いお話を書いていただきました。本文のなかでも触れたように新年度から自主講座やロビー・コンサートの企画・運営ボランティアを募集します。いかがでしょうか。

(杉山)

編集 宮崎 玲子／水野 愛子／杉山 博之  
伊奈 由希子／安井 智子／山田 泰子  
協力 愛知県美術館企画普及課

発行 2001年3月  
愛知県美術館友の会  
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2  
愛知芸術文化センター内  
Tel 052-971-5511(代表) 内線347  
Fax 052-971-5604  
e-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

表紙の写真は、トゥールーズ＝ロートレック(1864-1901)の《庭の青葉の中に座る婦人》(1890-91)。4月13日から5月27日迄、愛知県美術館で開催される企画展に展示される予定。

デザイン/レイアウト

小島 篤／鈴木 彩子